

第七章 植民地（四）

第三部 アメリカの発見と喜望峰を通る東インドへの航路の発見がヨ

ーロッパにもたらした利益（一）

以上が、ヨーロッパの政策がアメリカの植民地にもたらしたよい点である。

では、アメリカが見つかり、人々が移り住んだことは、ヨーロッパにどのような影響を与えたのか。

その利益は、大きく二つに分けられる。第一に、欧州を一つの大国とみなすとき、これらの大きな出来事によって欧州全体が得た共通の利益。第二に、各宗主国が自らの権限や支配を行使した結果、自国の植民地からそれぞれ得た固有の利益である。⁽¹⁾

欧州を一つの大国として見たとき、一般に得られる利点はおおむね二つにまとめられる。第一に、受ける恩恵が大きくなること。第二に、産業がさらに発展することである。アメリカからヨーロッパにもたらされた余った産物は、この大陸の人びとに、便利で実用的なもの、楽しみのためのもの、飾りのためのものなど、さまざまな品を提供し、

その結果、生活の楽しみやゆとりを大いに広げた。

アメリカの発見と植民は、第一に、スペイン・ポルトガル・フランス・イングランドのようにアメリカと直接交易した国々の産業を、第二に、オーストリア領フランドルやドイツ諸邦のように他国を通じて自国の産品を送り出した国々の産業を、それぞれ発展させた。これらの国々はいずれも、余剰の産品を売る市場をはっきりと広げ、その結果として生産量の増加がうながされたのである。

一見すると、アメリカへ自国の産品を一度も直接送っていないハンガリーやポーランドのような国々の産業までが、この大事件の恩恵を受けたとは考えにくい。だが、現実にはそれは疑いない。両国でも新大陸産の砂糖・チョコレート・たばこが消費され、その代金は、両国の産業が生み出した品物、あるいはそれを売って得た金で支払われた。つまり、アメリカ産品という新しい価値・新しい交換品が両国に流れ込み、現地の余剰品と引き換えられることで、その余剰に新しく、より広い市場が生まれたのである。こうして余剰の価格は上がり、生産拡大への動機は強まる。たとえその余剰の一部が直接アメリカへ渡らなくとも、アメリカの余剰で支払いが行われる他国へ送ることができ、もともとアメリカの余剰産品が動かした交易の循環のなかで、自然と販路を見いだすこ

3 第七章 植民地（四）

とができるのである。

アメリカと品物のやり取りをしない国々でさえ、これらの大きな出来事は、暮らしのゆとりを広げ、産業を活気づけた。というのも、アメリカとの交易で第三国の余剰（余った分）が増え、その見返りに別の種類の品がいつそう豊かに流れ込み、生活の享受が広がったからである。同時に、新しい交換品が提示されて販路が広がり、余剰の価格が上がって生産が促された。ヨーロッパの大市場に毎年投入される商品の総量は、アメリカに由来する余剰分だけ増え、その拡大に応じて各国の取り分も増した。結果として、各国の享受は高まり、産業はいつそう活気づいた。

本国による通商の独占は、欧州全体、とりわけアメリカ植民地の豊かさと産業を押し下げ、本来なら達していたはずの水準を妨げる。植民地の産物を他国で高くすれば消費は減り、植民地の産業は縮む。さらに他国にとっても、支払う価格が高いほど暮らしの豊かさは損なわれ、売り手が受け取る代金が少ないほど生産は細る。逆に、他国の産物を植民地で高くすれば、同じ理屈で他国の産業と、植民地の豊かさ・産業の双方が抑え込まれる。これは、特定の国の利益を名目に、ほかのすべての国の暮らしに足かせをはめ、産業の発展を妨げる重荷であり、その害は何よりも植民地に重くのしかかる。しか

もこの独占は、できるだけ多くの国を特定の市場から締め出すだけでなく、植民地をできるだけ特定の市場に縛りつける。あらゆる市場が開かれているときに一つの市場から外れるのと、ほかが開ざされるなかで一つの市場に押し込まれるのでは、差はきわめて大きい。そもそも、欧州がアメリカの発見と植民から得る豊かさや産業の伸びは、植民地の余剰の産物に由来するが、本国の独占は、その源を本来より乏しくする方向に働く。

各宗主国が自国の植民地から受ける利益は、大きく二つに分けられる。第一に、どの帝国にも共通して見られる、支配下の属州から生じる一般的な利益。第二に、アメリカにおける欧州の植民地のように、性格がきわめて特異な属州から生まれる、固有の利益である。

共通の利益は大きく二つある。すなわち、防衛のために兵力を出すことと、ふだんの統治を支えるために必要な歳入である。ローマのコロニアは、ときにはこの両方を担った。これにくらべ、ギリシャの植民市は兵を送ることはあっても、母市への上納はめったになく、母市の支配に従うという意識も弱かった。戦時にはおおむね母市の同盟者となったが、平時にはその支配下の民であることは、ほとんどなかった。

アメリカ大陸にある欧州の植民地は、本国の防衛に兵を出したことがなく、自分たちを守る力さえ十分ではなかった。そのため、本国が戦争に関わるたびに、植民地の防衛は本国の兵力を大きく分散させる原因となった。ゆえに、この点に限って言えば、すべての欧州植民地は例外なく、本国の力を強めるどころか、かえって弱める要因であった。本国の防衛や民政の費用を実際に賄ったのは、スペインとポルトガルの植民地だけであつた。これに対し、イングランドをはじめ他の欧州諸国の植民地に課された税は、平時の支出をまかなうにも足りないことが多く、戦時の費用を賄えたためではない。したがって、こうした植民地は、本国にとって歳入の源というより、むしろ持ち出しのものであつた。

この種の植民地が宗主国にもたらす利益は、アメリカにあるヨーロッパ型の植民地という、きわめて特殊な性質をもつ地域から生まれる特別な利益に限られ、その唯一の源は独占的な貿易である。

独占通商が行われると、たとえば英領植民地の余剰産物のうち「列举品目」（特定の品目）はイングランド以外へは送れず、他国は結局それらをイングランドから買うほかない。したがって、これらの品はイングランドでは他国より安く手に入り、同国が受け

る恩恵をいっそう大きくする。同時に、産業の振興にもつながる。というのも、イングランドは列挙品目と引き換えに自国の余剰産物売る際、他国が同じ取引をする場合よりも有利な価格を得やすいからである。たとえば、イングランドの製造業者は、他国の製造業者よりも、自国植民地産の砂糖やたばこを多く購入できる。ゆえに、英の製造品と他国の製造品がともに英領植民地の砂糖やたばこで交換される場面では、この価格上の優位が英側への追加的な振興策として働く。要するに、植民地との独占通商は、それを持たない国々の恩恵と産業を抑え込みつつ、それを持つ国々には他国に対する明白な優位を与えるのである。

ただし、この優位は「絶対的」なものではなく、「相対的」な優位にすぎない。自由貿易のもとで自然に達したはずの自国の水準を高めた結果ではなく、むしろ他国の産業や生産を抑えることで、その国を相対的に上位に立たせているからである。

たとえばメリーランドやバージニアのたばこは、イングランドの専売のおかげで、イングランドでは（多くを買い入れるフランスよりもしばしば）確かに安く手に入る。だが、もしはじめから、フランスを含むヨーロッパのすべての国に対して、メリーランドやバージニアとの自由な取引が常に認められていたなら、今日までにこれら両植民地の

たばこは、他国に対してだけでなく、イングランドに対しても、今より安く流通していた可能性が高い。より広い市場が得られていれば、生産は大いに増え、（今なお穀物作より高いとされる）たばこ園の利潤は、穀物園のそれという自然な水準まで下がり、値段もいくらか下がっていたに違いない。したがって、同じ量のイングランド産品や他国産品を差し出せば、今より多くのたばこをメリーランドやバージニアで手に入れられ、その分、そこへ売る自国産品も、いっそうよい値でさばけただろう。ゆえに、この「雑草」は、その安さと豊富さによって、イングランドであれ他のどの国であれ、消費を増やし産業を活発にするかぎりにおいて、自由な取引のものであるほうが、現在よりもさらに強く、この二つの効果をもたらしていた可能性が高い。もっとも、その場合、イングランドは他国に対して優位には立てなかったであろう。自国の植民地のたばこを少し安く買い、かわりに自国の産品を少し高く売ることができたかもしれない。だが、それは他国にも同じように可能であり、イングランドだけが特別に有利な条件で取引することはできなかったはずである。すなわち、イングランドは全体としては利益を得たかもしれないが、相対的な優位は確実に失ったであろう。

しかし、植民地貿易で相対的な優位を得ようとし、できるかぎり他国を締め出すとい

う、ねたみと害意に満ちたやり方を進めるなかで、イングランドは、本来なら自国も他国もともに得られたはずの絶対的な利益の一部を犠牲にした。さらに、商業のほぼあらゆる他の分野でも、絶対的にも相対的にも自ら不利を負うことになった、と考えるに足る確かな理由がある。

航海法によって植民地貿易を独占すると、それまで関わっていた外国資本は当然のように撤退した。これにより、以前は一部しか担っていなかったイギリス資本が、以後は全体を担わねばならなくなった。ヨーロッパの品物の供給については、従来は一部を担当していた資本だけで全量を賄うことになったため供給が不足し、価格は必然的に高くなった。植民地の余剰産物の買い入れでも事情は同じで、それまで一部しか買っていなかった資本が全量を引き受けることになったが、旧来の価格水準ではとても引き受けきれず、結果として実際に買った分はどうしても安く買いたたかれた。このように、売値は高く、買値は安い取引となる以上、利益は他の商業部門の通常の水準を大きく上回り、きわめて高くならざるをえなかった。植民地貿易におけるこの余分に高い利益は、他部門から資本をそこへ呼び寄せた。もつとも、資本の流入が進めば、植民地貿易では資本同士の競争が次第に強まり利益は下がり、逆に他の部門では競争がゆるんで利益は上が

る。その結果、各部門の利益は、従来とは異なる、以前よりやや高い新しい均衡水準へと、しだいに収束していったのである。

この独占は、ほかの部門から資本を引き寄せると同時に、全体の利潤率を自然な水準より少し高めるという二つの効果を、導入の初めだけでなく、その後も一貫してもたらしてきた。

第一に、この独占は、ほかのあらゆる取引分野から資本をつねに吸い寄せ、植民地貿易へ向けさせてきた。

航海法の制定後、英国の富は大きく増えたが、その増え方は植民地ほどではなかった。ふつう、国の富が増せば対外貿易もそれに合わせて広がり、総生産が増えれば余剰生産も同じように増える。ところが英国は、植民地との対外貿易をほぼ独占しながら、その規模に見合うだけ商業資本を十分に増やすことができなかった。その不足を埋めるため、これまで他の貿易部門に投じていた資本を継続的に引き抜き、さらに本来ならそこへ流れ込んだはずの資本までも、植民地貿易に振り向けざるをえなかった。実際、航海法のうち、植民地貿易は絶えず拡大する一方で、欧州向けを中心とする他の対外貿易は、持続的に衰えた。輸出向けの製造業も、従来のように近い欧州市場や、やや遠い地中海沿

岸の市場に合わせるのではなく、もつと遠い植民地の市場——しかも競争の激しい市場ではなく独占の利く市場——に合わせるようになった。他部門の衰退の理由を、マシュー・デッカーらの言う過重・不適切な課税や高賃金、ぜいたくの増大などに求める説もあるが、そうした要因は結局、植民地貿易の行き過ぎた拡大に帰着するといえる。英国の商業資本は、航海法以後に大いに増えたとはいえ、無限ではなかった。しかも、その増加は植民地貿易の伸びに見合うほどではなかった。したがって、他の部門から資本を振り向けずにその貿易を支えることはできず、その結果として、他部門の縮小は避けられなかったのである。

なお、イングランドは、航海法が植民地貿易の独占を打ち立てるより前、いや、その貿易が目立つ存在になる前から、すでに大きな商業国家であり、その商業資本も日ごとに力を増していた。クロムウェル政権下の対蘭戦では英海軍はオランダをしのぎ、チャールズ二世治世初頭の戦争でも、ついには仏蘭連合艦隊に少なくとも肩を並べ、おそらくはそれ以上であった。この優勢は、たとえ当時のオランダ海軍が通商規模に見合う力を保っていたとしても、ほとんど引けを取らなかったにちがいない。だが、これらの戦争で示された海軍力の強さは、航海法のおかげではない。第一の戦いには同法は

ようやく構想が固まりつつある段階にすぎず、第二の戦いの前には法律にはなっていたが、はつきりした効果——とりわけ植民地貿易の独占が効いてくる効果——が現れるには、時期尚早であった。当時の植民地とその貿易は、今日と比べればごく小さい規模である。ジャマイカ島は衛生状態の悪い荒地で人はまばら、耕作はごくわずか。ニューヨークとニュージャージーはオランダ領で、セント・クリストファー島の半分はフランス領であった。当時、アンティグア、両カロライナ、ペンシルベニア、ジョージア、ノバ・スコシアはまだ未開拓であり、バージニア、メリーランド、ニューイングランドはすでに植民が進み繁栄していたものの、今日見るような富・人口・改良の急速な伸びを、欧米の誰も予想していなかった。要するに、そのころ現在の姿にいくらか似た重要な植民地といえば、せいぜいバルバドスくらいであった。しかも、航海法が施行されたのちもしばらくは、その運用は厳格ではなく、イングランドが手にした植民地貿易の利益も一部にとどまっていた。したがって、当時のイングランドの大商業と、それを支えた強力な海軍の源泉は植民地貿易ではなく、主として欧州および地中海諸国との貿易であった。ところが、今日の英国がその種の貿易から得ている取り分だけでは、当時のような海軍力は支えられまい。もし、成長途上にあった植民地貿易が万国に自由に開かれ

ていたなら、英国に回ってきたであろう取り分（それはおそらく相当な額になったはずだ）は、従来からの大きな貿易に上乘せされていただろう。だが独占の結果、実際に起きたのは、植民地貿易の増加が旧来の貿易に加わることでなく、むしろ貿易全体がその方向へ全面的に転じてしまったということである。

第二に、この独占は、英領植民地が諸外国に開かれていたなら自然に下がっていたはずの、英国の各種取引部門の利潤率を、むしろ高く保つように働いた。

独占は、その貿易に対して、イギリスの資本を本来より多い割合で引き寄せた。一方で、外国の資本は締め出された。結果として、自由貿易であれば自然に集まっていたはずの総資本の量は、むしろ小さくなった。資本どうしの競争が弱まれば、その部門の利潤率は当然上がる。同じことが他の部門でも起こり、イギリス資本どうしの競争が弱まった分だけ、利潤率は押し上げられた。したがって、航海法の制定以後のどの時点でも、英国の通常利潤率は、植民地貿易でも他のあらゆる貿易でも、本来より高い水準に保たれていたはずである。もっとも、航海法の制定後、通常利潤率が大きく低下してきたのは事実である。しかし、その独占の支えがなかったなら、その低下はさらに大きかったに違いない。

しかしながら、どの国であっても、通常の利潤を本来の水準より高く保つ政策は、その国が独占していないすべての取引分野で、絶対的にも相対的にも不利をもたらす。

絶対的不利とは、こういう状態を指す。独占のない市場で商人がより多くの利益を得ようとする、国内で売る輸入品にも、海外へ出す自国の品にも、これまでより高い値段を付けざるをえない。結果として、その国は高く買い高く売るしかなく、買う量も売量も減ってしまう。ゆえに、国が受ける恩恵は本来より小さくなり、生産量も少なくなる。

相対的不利も生まれる。理由はこうだ。このような分野では、絶対的不利を負うのが自国だけであるため、他国は本来より有利さが増すか、不利さが小さくなる。結果として、彼らは自国が享受し生産する量に比べ、より多くを享受し、より多くを生産できるようになる。さらに、自国産の価格が本来より高止まりすれば、他国の商人は外国市場で自国より安く売ることができ、その結果、独占の及ばない取引分野から自国は次々に押しのけられてしまう。

英国の商人はしばしば、海外市場で自国の製品が価格で不利になるのは、国内の賃金が高いからだと不平を述べる。しかし、資本から得る利益率の高さについては、ほとん

ど語らない。他人の過大な利益を非難しながら、自分たちのそれには触れないのである。ところが実際には、英国資本の高い利潤は、多くの場合、賃金の高さと同程度に、時にはそれ以上に、英国製品の価格を押し上げる要因となりうる。

こうして、イギリスの資本は、独占の手が及ばない多くの取引分野から、一部は引き揚げられ、また一部は追いやられてきたと言ってよいだろう。とりわけ、欧州向けの貿易、なかでも地中海沿岸諸国との取引からの流出が目立っている。

一因は、植民地貿易がたえず拡大し、高い利益の魅力に対して、それを支える資本がいつも不足していたことである。前年に使った資本だけでは翌年の取引をまかないきれず、より高い利回りを求めて、ほかの部門の資本が次々と流れ込んだのである。

もう一つの要因は、国内の利潤率が高かったため、独占がない各取引分野では他国が有利となり、その結果、イギリスの資本がそれらの分野から追いやられたことである。

さらに、植民地貿易の独占は、別の分野から英国の資本の一部を引き寄せる一方で、植民地貿易から排除された外国の資本を、本来は向かわなかった分野へ流れ込ませた。

その結果、そうした分野では英国の資本同士の競争が弱まり、英国側の利潤率は本来より高い水準にとどまった。他方で外国資本の競争は激しくなり、外国側の利潤率は本来

より低下した。いずれの場合でも、英国はそれらの他分野の取引において相対的不利を免れなかったのである。

相対的な不利も生まれる。この種の取引分野では、先に述べた絶対的不利が自国だけにかかるため、他国は本来より有利さを増すか、不利でもその度合いが小さくなる。彼らは、自国の消費や生産に比べ、より多くを消費し、より多くを生産できるようになる。自国産の価格が本来より高止まりすれば、他国の商人は海外の市場で自国より安く売ることができ、結果として、独占の影響が及ばない取引分野から自国を次々に押しつけてしまう。

英国の商人はしばしば、外国の市場で自国の製品が価格競争で不利になるのは英国の賃金が高いからだと不満を述べるが、資本の利潤の高さについてはほとんど語らない。他人の過大なもうけは非難しながら、自分たちのもうけには触れないのである。だが実際には、英国の資本が高い利潤を得ていることは、多くの場合、英国の賃金の高さと同じくらい、時にはそれ以上に、英国製品の価格を押し上げる原因となり得る。

注

(1) 本書が刊行された一七七六年、北米のイギリス領十三植民地はイギリスからの独立を宣言した。その前の一七六三年、フレンチ・インディアン戦争でイギリスが勝利すると、戦費や植民地統治の費用をまかなうとして税が引き上げられ、貿易もイギリス以外の相手とは取引しにくくなるよう制度が変えられた。重い税と貿易の規制が重なった結果、植民地側は一七七五年四月に武器を手にして立ち上がり、戦いは一七八三年九月まで続いた。